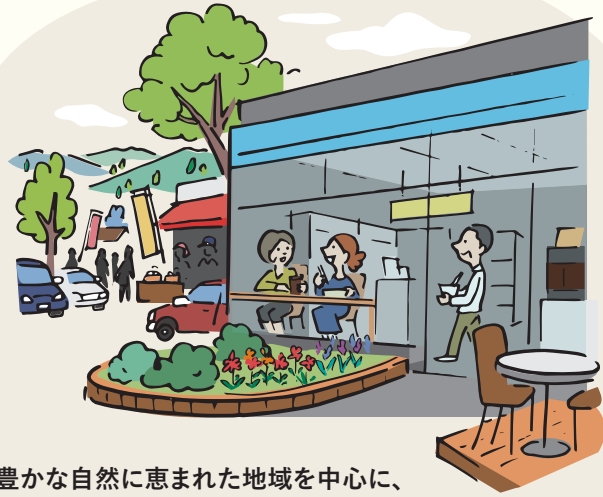


地域の元気を創出・拡大
8つの地域
プロジェクト
モデル

※ ⑧は県内に点在する各多自然地域で展開



豊かな自然に恵まれた地域を中心に、県下の小規模集落は10年で倍増。こうした地域が「楽しく暮らせる場」であるための取り組みについて、県の地域創生戦略会議企画委員会の委員長で、住宅の建築設計や住民主体のまちづくりなどに携わる(有)スタヂオ・カタリスト代表取締役の松原永季さんに聞きました。

松原さんは2008 (H20) 年から県が進めてきた「地域再生大作戦」のアドバイザーも務め、これまで500回以上、県内各地の集落に足を運んできました。そこで聞いた住民に共通する声は「若者や子どもが減り、地域活動の担い手がない」というもの。松原さんは「若者が定住するには地域に根づいた産業の中に働く場をいかに確保するか。男性に比べてライフステージの変化が大きい女性が、その時々の変化に対応して働ける仕事を見つけやすくすることも大事」と話します。

地域に共通するもう一つの声が「気軽に集える地域の拠点がなくなった」。その悩みを解決する県内の先行事例の一つに、神河町長谷地区の村営「ふれあいマーケット」があります。日用品や食料を扱う店にガソリンスタンドを併設し、定期的に住民が喫茶やレストランを運営しています。

生きがいをうむ小さな地域経済サイクルを

松原さんは「地域の中で小さく回る経済サイクルが重要です。コミュニティの中心の場の運営はボランティアもいいですが、多少のお金のやりとりがあったほうが、お互い気兼ねなく取り組むことができます。お金そのものよりも商売のやりとりで派生する営みの中に生きがいを感じる人が多いでしょう」といいます。

参考になりそうなのが沖縄本島北部や離島の集落に今も50余り残る共同売店だそう。「人々のたまり場で、日常生活に必要な品を手に入れ、地元産品を売る。郵便を扱い、かつてはお金を貸したりもしたそうです」。昔、集落にあったよろず屋のイメージに近そうです。

また、県下に約100人いる地域おこし協力隊にも期待を寄せています。「彼らには地域内に不足しがちなデザイン、企画力、事務局機能、人をつなげる触媒的役割を担ってもらえたらいいなと思っています」。こうした若い力が集落再生の鍵となるはず。若い力が求められています。

7
令和の“御食国”
プロジェクト

かつて御食国と呼ばれ、タマネギ、レタス、トラフグ、淡路牛、アカウニなど多彩な食材が手に入る食の宝庫・淡路島は、世界中から観光客が訪れる美食のまちサンセバスチャン（スペイン）のようなまちになれるかもしれません。

気軽にリゾート気分が味わえる観光地として日帰り客は増加傾向。ここで食と農をテーマに地域文化を育て、若者の就業・起業の支援や食材の新たなブランド化、島内資源を組み合わせた周遊・滞在型ツーリズムなどに取り組みます。関西国際空港や神戸空港からも近いことからインバウンドを促進し、島内を周遊できるようにします。



松原永季さん
(有)スタヂオ・カタリスト
代表取締役

⑧ 多自然地域
一日生活圈維持
プロジェクト

専門家に
ご意見を伺いました



▶さらに詳しく

石川教授はラジオ関西の就活応援番組「ネイビーズアフロのレディGO! HYOGO」にも出演



就活前から

考えておいてほしいこと

兵庫県の就活お役立ちサイト

「ひょうごで働こう! マッチングサイト」

スマホから、希望条件に応じた企業検索、スカウト通知受信ができます。また、東京圏からの移住者には最大100万円の移住支援金が支給されます。



[ios]



[android]

女子学生の就活応援ラジオ番組「ラジオ関西」 「ネイビーズアフロのレディGO! HYOGO」

県内企業で活躍している先輩女性社会人をゲストに迎え、就活アドバイスや仕事の魅力を本音で伝えます。



職場は、新たな自分を発見できる場所。仕事は自分の経験値を上げ、人生の目標を達成できるような人間へと成長させてくれます。どんな職場でも与えられた難問に「楽しみながら果敢に」取り組んだ後は、自分の可能性が広がっていることを必ず実感するはず。

まずは、自分の人生の目標について改めて考えた上で、そのスタートにふさわしい場所を積極的に探してみてください。きっと素晴らしい未来が待っていますから。

ゼミ生たちの就活を応援する
石川路子さん

(神戸市在住、甲南大学経済学部教授、地域連携センター参加)

Introduction Interview

やりたいことがわからない人は どんな生活をしたかを考えてよう

「こんな仕事がしたい」と明確な目標を持つ学生は就活にも迷いありませんが、大半は「やりたいことが見つからない」学生たち。そんな時は、ただやみくもに自己分析するよりも、将来どんな生活を送りたいのか、といった「理想の生き方」から考えてみると仕事の選択肢が少しは見えてくるはず。あくまでも「仕事は生活の一部」であることを忘れずに。

2019 (R1) 年11月に兵庫県が県下35大学3967人の学生を対象に実施したアンケートでは、65.5%の学生が県内での就職を希望する一方、実際の県内就職者は2018 (H30) 年度で28.4%と3割を切っています。このギャップの要因は、大企業や本社機能が大都市に集中していることに加え、近年のインターネットに依存した就活によるものだと考えています。

就職活動を行っている、就活生には否が応でも大量の情報が舞い込んできます。情報が多いことは一見良さそうに見えますが、過剰な情報に振り回され混乱してしまう就活生も多いです。

次々と送られてくる情報は、そのほとんどが採用に高いコストを支払うことのできる大企業からのもの。そのネームバリューに惹かれ、「何となく」エントリーしてみても、結果はお祈りメール*が届くだけ。それほど意中の企業でもなかった

はずなのに「お祈りされる」回数が増えるにつれ人格を否定された気持ちになり、就活さえも諦めてしまう学生も少なくありません。本当にもったいないです。

厚生労働省の調査によると、大学の新卒生(2016 (H28) 年3月卒業者)の就職後3年以内の離職者は3割を超えています。仕事内容のミスマッチも離職理由の一つですが、自分の思い描いていた理想の日常生活とのギャップも大きな理由の一つです。例えば、満員電車での長時間通勤。職場でのストレスだけではなく日常生活から受けるストレスは、知らず知らずのうちに心身に大きな影響を及ぼします。自分の住み慣れたまちで就職することは、日常生活のストレスを軽減し、よりQOL(生活の質)の高い生活を送ることにつながるのではないのでしょうか。

就活で自分を成長させてくれる 新たなスタート地点を見つけよう

やりたいことがわからなくても、就職してから気づくこともたくさんあります。



石川路子さん

*末尾に「今後のご活躍をお祈りします」などの文言がある不採用通知メール